

弁護士法人福岡法律事務所

代表弁護士福岡則博、弁護士尾崎悠吾、弁護士松村隆志

〒665-0845 兵庫県宝塚市栄町2丁目2番1号ソリオ3(5階)

TEL: 0797-87-5606 FAX: 0797-87-7160

HP: <https://www.fukuma-law.com/>

Mail: office@fukuma-law.com

執筆: 弁護士福岡則博



Legal F : Forces for Friends, Families and Fortunes (友人、家族、財産を守る力)

テーマ「千日回峰行とその行者の方々」

オリンピックの金メダルやノーベル賞は人間の身体能力あるいは知性の頂点と言うべきものですが、人間精神の頂点とも言うべき「悟り」に至るための努力、試練はどのようなものでしょうか。今回は、その一例として、千日回峰行を取り上げてみたいと思います。

1 「人生を楽しく過ごさない」(天台宗阿闍梨 酒井雄哉 誠文堂新光社 2019年)

本書は、天台宗比叡山の歴史上3人しかいないとされる千日回峰行を2回達成した人のひとりである酒井氏の晩年の言動を知人鷹梁氏がまとめたものです。千日回峰行は、千日間(実際は975日)毎日40km前後山岳地域を巡拝することを7年かけて行い、期間中は天候・体調その他事由の如何を問わず一日でも不実行となれば即刻自害というまさに命を賭けた行であり、最後の「堂入り」においては9日間の完全なる断食・断水・断眠・断臥(四無行)の中で真言を十万回唱えるものです。

酒井氏は、特攻志願、敗戦、結婚、妻の死を経て、幾度か訪れていた比叡山でたまたま目にした千日回峰行者の「堂入り」満行の姿に感動し、行者に強い憧れを持つに至り、39歳で得度(出家)、48歳で1回目の千日回峰行を開始し54歳で満行され、翌年2回目の千日回峰行に挑戦、60歳で満行されています。2回目の回峰行を行うには前回の満行から半年以内に始めなければならないとされているところ、酒井氏は、「やるかやらないかなんて迷わなかったね。行は私の人生の最後の砦だからね。勉強もダメ、仕事もダメ、何をやってもダメだったわしが、ようやくたどりついたのがお山での行。捨て身になってやるしかないんだ。血の最後の一滴ま

でも振り絞って全力投球することしか頭になかった」と述べられています。

2 「人生生涯 小僧のころ」

(塩沼亮潤 致知出版 2008年)

3 「大峯千日回峰行」

(塩沼亮潤・板橋興宗(対談) 春秋社 2007年)

塩沼氏は、小学校5年生のとき上記1の酒井氏の千日回峰行についてのNHK番組を見られ「何かそれに吸い込まれるような気がして、自分の人生はこれだ」と思われ、役行者(えんのぎょうしゃ)を開祖とする吉野山金峯山寺(きんぷせんじ)において得度され、1300年間において二人しか達成者のいない大峯(おおみね)千日回峰行を満行された方です。塩沼氏が中学2年の時、両親が離婚し、その後、母と祖母との3人暮らしが始まりますが、「由緒正しき貧乏人」として暗さや不安は微塵もなく、近所の方が「これ食べて」と持ってきてくれるようになり、人が集まれば、塩沼氏も含めて酒盛りが始まり、近所のパチンコ店に行っては落ちている球を拾っては打ち、出てきた球は米、味噌、醤油に交換して家計を助け、高校時代は、制服を着るのがもったいないとして、1日中ジャージ姿、冬は柔道着で授業を受けていたとのこと。

塩沼氏は、当初、比叡山に行かれる予定でしたが、その直前、金峯山寺の千日回峰行がより厳しい行であることを知り、迷わずそちらに決められています。「自分が楽だと思える方を選んでしまったら一生後悔すると思った」からだと言われています。

金峯山寺の行は、足掛け9年に及び、吉野山金峯山寺蔵王堂から大峯山(おおみねさん)山上ヶ岳(さんじょうがたけ)まで往復48キロ、高低差1300メートル以上の山道を16時間かけて1日で往復し、合計4万8000キロを歩き続けるというものです。朝

は、午後11時25分に起床し、気温4、5度くらいで滝に打たれ、500段の階段を上って参籠所に行って白装束をまとい、自決用の短剣・紐等を持ち、午前0時30分出発し、歩き始めると人と話してはならず、道中180カ所の神社・祠のそれぞれに般若心経を唱え、午前8時半頃大峰山頂上に到着し、そこで昼食をとって山を下り、午後3時30分過ぎに蔵王堂に戻ってきます。深夜を含め15時間山の中を歩き、次の日の準備、掃除、洗濯等すべて自分で行き、睡眠時間は4、5時間、途中で行をやめれば自死を遂げねばならないのです。想像を絶する過酷な行ですが、塩沼氏は、「ただひとつだけ胸を張って言えるのは、どんなにつらくても苦しくても、『嫌だな、行きたくないな』という日はたった一日もなかったということです」と述べられています。

回峰行中の言葉。「行くか行かないじゃない。行くだけなんだ。」(序盤)、「たとえどんな苦しみも過ぎてしまえばただの思い出。」(中盤)、「涙で滲みし大峯の道も、今は喜びの道、されど同じ道」(後半)、「苦しみの向こう、悲しみの向こうには何があるのだろうと思っていたが、そこにあったものは、それは感謝の心ただ一つ」(終盤)等々。千日回峰行満行者であれば、本山に残るのが通例であるところ、塩沼氏は、故郷仙台に戻り、住職の地位にありながら修行僧と同じお勤めをされています。

4 酒井氏も塩沼氏も、いずれも先人の行者への憧れから千日回峰行に挑んでおられ、行者には何か人を魅了する超人的なオーラがあるようです。そして、お二人とも苦難は苦難として受け止めつつ、それを超越した歓喜、感謝の世界に到達されているのが印象的でした。ドストエフスキー氏の「カラマーゾフの兄弟」において、無神論者イワンが見た夢として、唯物論的哲学者が来世において千兆キロの旅を命じられ、10億年かけてその旅を終えて天国に入ると、その2秒後に、その哲学者は、千兆キロの千兆倍のそのまた千兆倍の距離を歩いてみせると叫んだという話が出てきます。私は、その話を読んだとき、天国に達する喜びには、過酷な試練にも耐えさせるだけの力があるものと解釈しておりましたが、今回、千日回峰行者の話を読んで、むしろ過酷な試練そのもののうちから生きる喜びと感謝が湧いてくるのか

もしれないと思った次第です。

